

第5章 アブ・シール南丘陵遺跡および ダハシュール北遺跡における保存整備計画試案

遺跡の特徴を活かした

アブ・シール南丘陵遺跡の保存整備計画案

柏木 裕之*

1. はじめに

アブ・シール南丘陵遺跡は、早稲田大学古代エジプト調査（隊長：吉村作治早大名誉教授）によって1991年に発見された遺跡である。遺跡が築かれた丘陵は、南側のサッカー遺跡群と北側のアブ・シール遺跡群のほぼ中間、砂漠と耕地の境界から西へ約2キロ入った内陸に位置する。標高約90m、周囲の砂漠よりも約30m高い。独立した丘のため頂部からの視界は大きく開け、ギザ遺跡の三大ピラミッドからアブ・シール、ピラミッド群、サッカー遺跡群、ダハシュールのピラミッド群までを一望の下におさめることができる。

周囲を見渡すことができる立地条件は軍事面にも利用され、丘陵には1970年代エジプト軍の基地が築かれていた。このため、一般の立ち入りは厳しく制限され、学術的調査も実施されなかった。その後中東戦争が収束するに伴い、アブ・シール遺跡に隣接する当該区域が考古省の管理下に移され、早稲田大学調査隊に調査許可が与えられた。また、こうした経緯から当地区がどのように呼び習わされていたのかについても不明であり、早大調査隊では、当遺跡の調査がアブ・シール遺跡のピラミッドの研究の一環として進められた経緯から「アブ・シール南丘陵」と命名している。

現地調査は2012年度までに22回を数え、丘陵遺跡の主要部分に関する発掘調査は概ね終了したといつてよい。現在は、これまでに出土した遺物の資料化と分析、遺構の保護、整備が課題として挙がり、取り組みが進められている。筆者は建築班としてアブ・シール南丘陵遺跡の調査に最初期から参加し、遺構の建築的研究に従事してきた。本稿は、出土遺構の研究成果を踏まえ、建築的な観点から保存整備の試案を提示し、将来の検討に資することを期待するものである。

2. 保存整備の基本方針

アブ・シール南丘陵は、尾根が東西に延びる自然の丘で、南西隅の標高が最も高く、東側と北側に向かって緩やかに下る地形をなしている。遺構は、南西隅の一画とその南東斜面に集中して築かれ、これまでに頂部から新王国時代の遺構4基、斜面から古王国時代および中王国時代の遺構2基が発見された。

遺跡の保存整備は、対象への深い理解に基づき、その特質を活かすように進める必要がある。そこで各遺構の保存整備計画に入る前に、アブ・シール南丘陵遺跡全体の特徴と魅力を整理し、保存計画の基本方針として提示したい。

* サイバー大学世界遺産学部客員教授

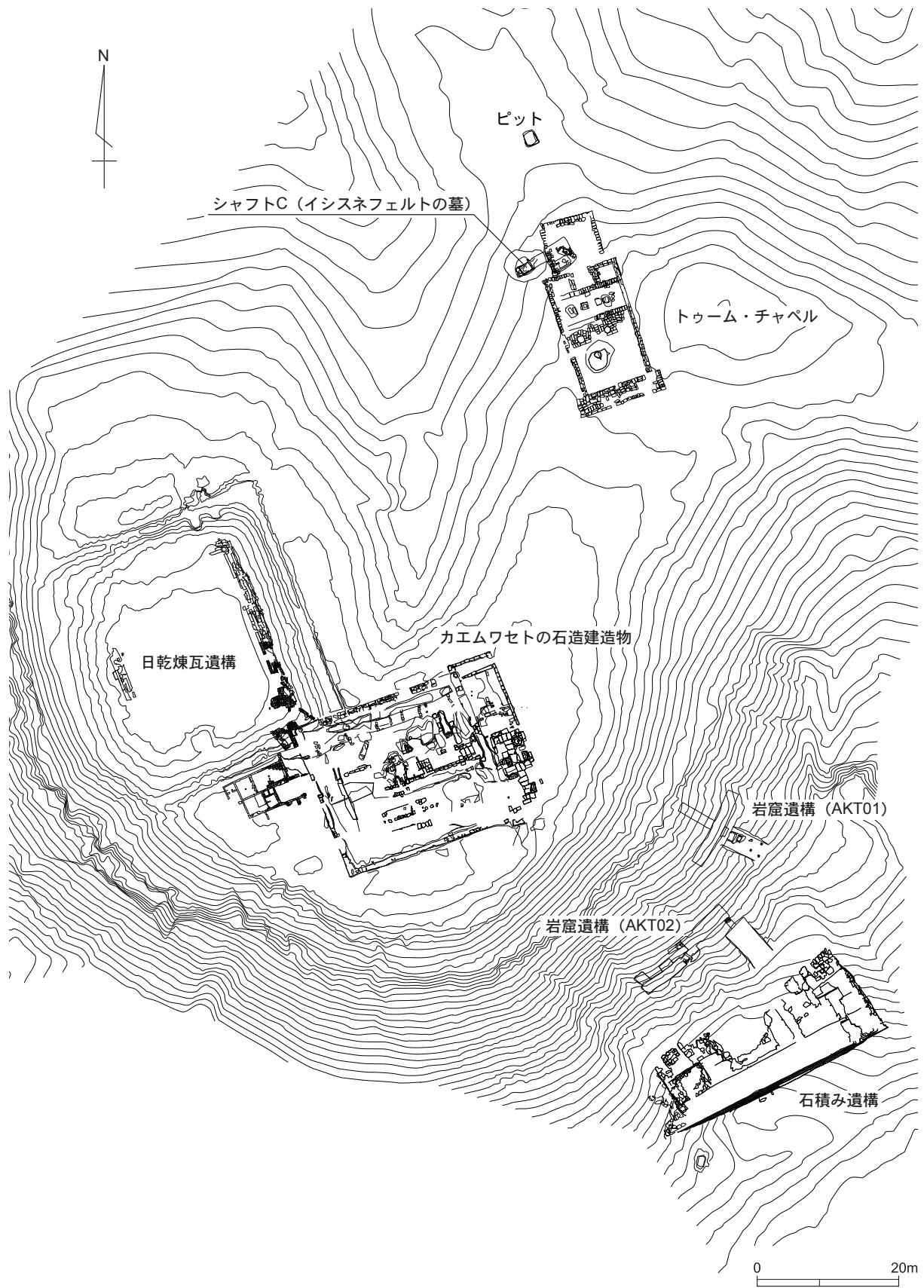


Fig.1 アブ・シール南丘陵遺跡地図

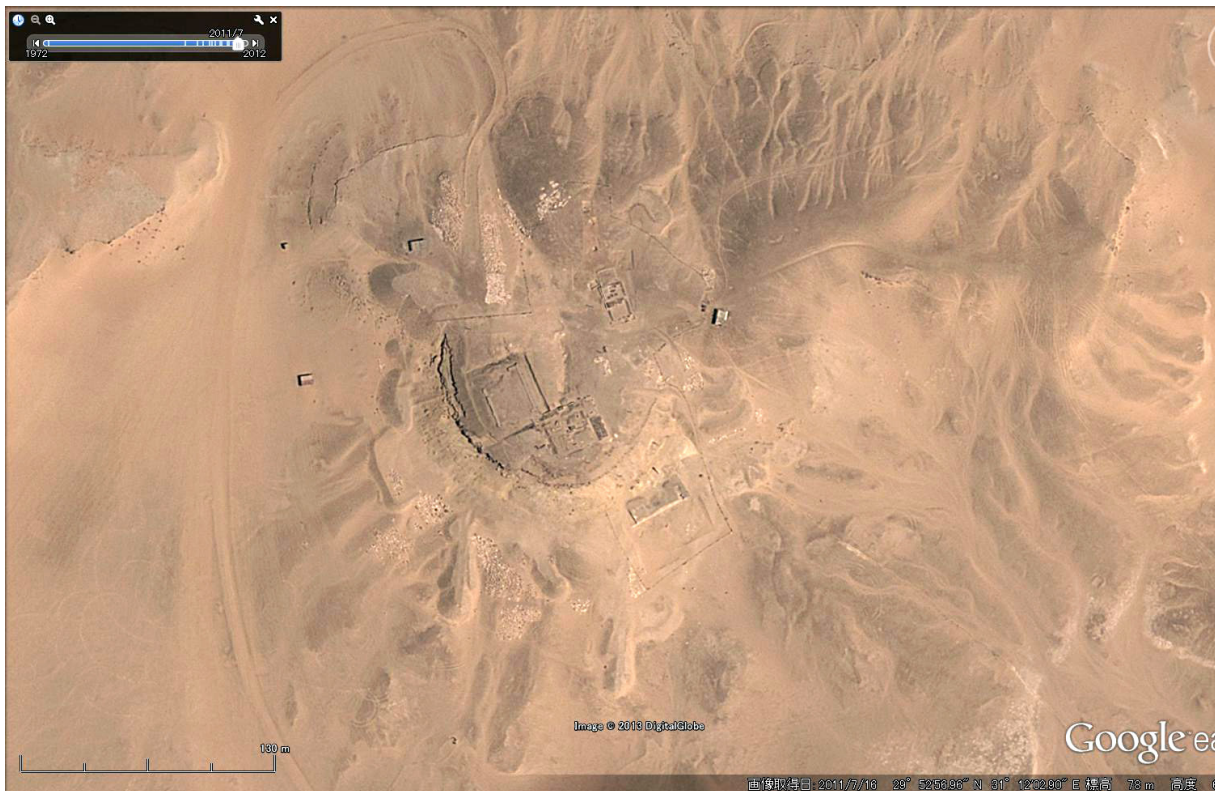


Fig.2 アブ・シール南丘陵遺跡衛星写真

(1) 優れた眺望の活用

ギザからダハシュールに至るメンフィス地域には数多くのピラミッドが建てられたが、それらを一望の下におさめることができる場所は限られている。そうした中であって、孤立したアブ・シール南丘陵は、大パノラマを楽しむことができる希有な場所とってよい。ダイナミックな眺望は、写真などの映像資料で伝えることが最も難しい分野の一つであること考えれば、優れた眺望を重要な文化資源と捉え、積極的に活用する方法を模索すべきと考える。

とりわけ、観光において大きな魅力と可能性を秘めるため、一般の観光客を含めた多くの人が丘陵の頂部まで足を運ぶことを前提とした保存整備を考えることが望まれる。

(2) 歴史的な重層性の表示

発見された遺構は古王国時代初期、中王国時代、新王国時代に造営されたと考えられ、古代エジプト王朝時代全時代を通じて活発な建築活動が展開されたことが分かっている。ある場所に建物が長期間作り続けられる場合、すでに建てられた建造物を廃棄し、新たに別の建造物を作る場合がしばしば見られる。その結果「テル」と呼ばれるような、建物の基礎が折り重なるように残り、小高い丘を作るケースも多い。これに対し、アブ・シール南丘陵遺跡の場合、後の時代に再利用されたり、改変を加えられた建造物は見られるものの、建造物全体を大規模に破壊し、その上に新たに作り直したような形跡は認められなかった。すなわち、それぞれの遺跡が重なり合うことなく、独立した状態で位置しており、異なる時代のさまざまな建造物を同時に見ることができる

環境にある。そのためある特定の時代に焦点をあてた保存整備を行うのではなく、当遺跡が長期間にわたって重要な役割を果たし続けてきたことを理解できるような遺構の保存整備が望まれる。

(3) 出土遺構の高い価値

アブ・シール南丘陵遺跡から発見された遺構は、いずれも王や王族に関わる質の高い建造物であることが判明している。また単に建造物にとどまらず、壁面装飾や出土遺物も高い完成度を呈している点の特徴である。加えて遺構の建材に着目すると、石造が3基、日干レンガ造が2基、岩窟造が3基と、古代エジプトを代表する建築材料が全て揃っているとよく、各々の材料による高い建築技術をまとめて理解できるという点で魅力的である。

第一級の資料的価値をもつ遺構および遺物を備えた遺跡とよく、こうした価値を多くの人が理解し、またこれまでの研究成果を共有できるような保存整備が望まれる。

以上3点を整理すると、当遺跡は眺望の良さや遺構の歴史的重要性、また質的な高さという点で貴重であり、多くの人がその価値を体感し、共有することが望ましい。そのため、遺跡の保存整備の基本方針として、遺跡の価値を積極的に公開し、専門家から一般の観光客まで多くの人が楽しめるような場に作り挙げることを望ましいと考える。

3. 各遺構の保存整備計画案

以下では上記基本方針に沿って、各遺構の建築的な特徴、現在の状況、そしてこれからの保存整備のあり方について私案を記したい。

(1) 石積み遺構 (Fig.3)

①概要

石積み遺構は、丘陵南東斜面の裾野から発見された石灰岩ブロックを積み重ねた建造物で、その造営年代や治世年を直接示す文字資料は発見されていない。しかし、石材の特徴や内部に約20度傾斜させて積む手法、さらに厚さ2.5～3mの石積みの「層」を重ねる内部構造やモルタルを多用した組積法は、古代エジプト第3王朝時代（前2682～2614年頃）の建造物に広く見られる特徴と一致しており、この時代に造営された可能性が高いと判断された。古代エジプトに本格的な石造建築が成立する時代に造営された、世界最古級の石造建築の一つとよく、資料的価値の高い遺構と結論づけられる。

②現況

石積み遺構は、建立後4500年以上が経過し、露出していた上面の石灰岩ブロックは、剥片状を呈していた。層状に剥離した断片の裏側には粉末状の結晶が観察され、石膏を中心とする可溶性塩類が再結晶したものと判断された。一方、砂に埋もれていた下部は、総じて状態が良く、石材の目地に詰められたモルタルも指の痕が確認できるほどであった。これは砂の中に留まることによって、石材表面に結露が生じにくいことに加え、可溶性塩類の再結晶が石材の表面で起こらなかったためと考えられる。

遺構の劣化が砂に囲まれたことで抑制されたという現象は、遺構の保護に照らし合わせた場合、遺構を砂で

覆う方法が劣化の抑制に有効である証左とみなすことができる。遺構の保護保全を最優先するならば、完全な埋め戻しが最適であるが、遺構の重要性、資料的価値を鑑み、建築技術の特徴が視認できよう工夫をこらす方針が採られた。そこで、正面は露出保存とする一方、側面は壁を築いて保護に徹し、上面については砂で覆うことによって塩類風化の緩和を目指した。さらに石材が抜き取られた正面東側や上面西側の破損箇所を、内部構造の表示箇所として活用し、建築技術が観察できるようにした。

③保存整備計画案

2006年に実施された保護措置により、当面の劣化の進行を緩和することができた。その後の経過観察では、遺構に大きな破損はないが、部分的に上面のモルタルにひび割れが発生している。また遺構の上に敷いた砂に塩類が析出しているかを確認する必要もあろう。

遺構の公開を前提に保存整備のあり方を考えた場合、石積み遺構は内部に空間を持たないことから、遺構を外側から観ることに限られる。そのため全体像を把握するために、特段の措置を講じる必要はない。一方、石材を内側に傾斜させた重層積みの構造など細かな建築技術を視認する箇所としては、南面東側の石材が抜き取られた場所が適当である。建築技術の解説板の設置などを行うことによって、単なる石の塊にしか思われぬ建造物の魅力を伝えるよう工夫していくことが望まれる。

アブ・シール南丘陵遺跡の建造物は、その多くが丘の頂部に集中している。石積み遺構だけが丘陵の裾野に位置しているといってもよい。そのため観光客がこの丘陵を訪れた際の見学ルートを検討する必要があるだろう。また丘陵の斜面は急峻で滑りやすく、崖が迫り出しているところも少なくない。安全に上り下りが可能な斜面は石積み遺構の東側に走る谷にほぼ限られるが、発掘の廃土や砂が厚く堆積し、決して歩きやすい状況にはなっていない。そのため保存整備にあたっては遺構本体だけでなく、誘導路などの周辺整備も大切である。



Fig.3 石積み遺構

(2) 岩窟遺構

アブ・シール南丘陵遺跡の斜面からは二つの岩窟遺構が発見され、発見順にそれぞれ AKT01、AKT02 と命名された。以下、それぞれの遺構について述べる。

AKT01

①概要

岩窟遺構 AKT01 は南東斜面の中腹、石積み遺構の北東上方に穿たれた岩窟遺構である。壁面装飾や鎮壇具など遺構の造営年代を直接示す文字資料は発見されなかったが、内部に収められた遺物は中王国時代末頃を示していた。また王名を記した塑像も発見されるなど、重要な品を多数納めた、祭祀施設であったことを強く窺わせていた。

AKT01 は尾根治いの斜面を平坦に削って「前庭部」を作り出し、そこに地下への入り口として深さ 1 m の浅い竪坑が用意された。地下室は、横長の前室と奥に長い奥室が T 字型に配置された平面をなし、他に空間は認められなかった。

浅い竪坑から前室へ続く開口部には、入り口を塞ぐための封鎖壁が、石灰岩を積み重ねて築かれていた。封鎖壁は通常外側をモルタルで覆うが、興味深いことに石積みは内側の面を揃えるように積まれ、さらに内側に白色のプラスターが塗られていた。

遺構内部に納められた遺物の中には、クフ王の名を刻んだ塑像など極めて資料的価値の高い品が含まれており、遺構の性格を検討する上で重要である。

②現況

遺構は、丘陵を構成する岩盤のうち、軟らかなタフラ層に作られていたため、天井の岩盤は大きく崩落していた。発掘調査においては、木材で支保を築きながら少しずつ奥へ進む方法を余儀なくされ、支保は現在も残されている。

内部の調査で発見された遺物は収蔵庫で管理されている。ただし収蔵庫の容量には限りがあり、また当遺構には入り口に鍵がかかることから、資料整理が終了した土器類の倉庫として活用されている。このため遺構内部の状態を観察することは困難である。

③保存整備計画案

AKT01 は脆弱な岩盤層に作られているため、今後、小規模な崩落が生じる可能性は否定できない。現在も調査時に設置した木製の支保が残されており、安全性を考慮した場合、こうした補強は引き続き必要である。さらに遺構の壁面に装飾などが無いことを勘案すれば、一般の観光客を積極的に遺構内に入れるのは適当ではないと思われる。

AKT01 は、その性格や役割についてはっきりしない点が多いため、内部に収められていた遺物群の検討が極めて重要となる。遺跡の保存整備といった場合、構築物としての「遺構」に重点が置かれるきらいがあったが、遺物もまた遺構と同じぐらい重要な要素であり、両者を総合的に扱う必要があろう。

実物を遺構内に展示することは、防犯上などの理由で難しいことも多いため、例えばレプリカを制作するなどの工夫を行い、全ての遺物を一度に観察でき、調査研究が追体験できるような環境作りが望まれる。

また現在、遺構を土器の収納場所としているが、構造的に不安定であることを考えれば恒久的な場所を検討する必要がある。



Fig.4 AKT01 内部



Fig.5 出土遺物（セクメト女神像）

AKT02

①概要

石積み遺構の北側斜面から岩窟遺構 AKT02 が発見された。石積み遺構の東西ほぼ中心に位置し、豎坑の東西両側に部屋が設けられている。このうち、東室と命名された地下空間は、二つの部屋から構成され、豎坑と部屋との間には一枚岩を落とし込む封鎖法がとられていた。巨石を用いた封鎖は、第3王朝時代前後に広く見られる手法であり、内部から発見された遺物などから判断して、東室は石積み遺構に属する内部空間と考えられた。

東室は中王国時代に再利用され、奥の部屋の斜面側に新たな開口部が設けられた。開口部は石材を積み重ねて封鎖され、AKT01 と同様に内部から白色のモルタルで塗られていた。中王国時代の再利用にあたって、壁面の亀裂にモルタルを塗るなどの作業が行われており、古王国時代に納められた遺物もある程度除かれた可能性が挙げられる。そのため、東室の創建に関する詳しい年代や、遺構の性格、機能については不明な点が少なくなく、石積み遺構との関係性もさらに検討されるべき事柄である。

中王国時代には豎坑の西側にも新たな部屋が作られた。西室と名付けられたこの部屋は細長い1室からなり、奥に壁龕が設えられている。豎坑に面した開口部には、他と同じように石材が積み重ねられ、内側から白色のモルタルで覆われた。内部には祭祀の跡が明瞭に残され、興味深い資料を提示していた。

②現況

東室、西室ともに岩盤は安定しており、支保などの補強は不要と判断された。東室は中王国時代に作られた斜面側の開口部から容易に出入りすることができるため、出土した土器などの収蔵庫として利用されている。

③保存整備計画案

東室は石積み遺構の内部空間として機能していた可能性が高く、両者を一体として整備することが望まれる。石積み遺構は公開を前提に整備することを考えると、岩窟遺構も内部を公開する方向で検討することが望ましい。特に石積み遺構が作られた第3王朝末から第4王朝初期の遺構は数が少ないことに加え、内部は地下深くに作られているため、メイドゥームのピラミッド群などごく一部を除き、一般には公開されていない。岩窟遺構 AKT02 の場合、中王国時代に開削された新たな入り口から容易に内部へ入ることが可能であり、内部を公開することへの安全上の障害は低いと考えられる。巨石を用いた封鎖方法や内面から白色のプラスターで塗り込めた特異な方法もあわせて見ることができ、意義深い。

東室から発見された遺物は、この遺構の性格を広く検討する上でも重要である。遺物はそれが置かれた遺構と共に検討する必要がある、その空間を感じることでより理解が深まると思われる。遺跡の保存整備にあたっては、遺物のないがらんとし公開するのではなく、遺物と遺構がセットで検討できるような環境作りが求められる。

同じことは西室にも当てはまる。ただし西室は竪坑から入る必要があるため、一般の公開については慎重になるべきと考える。そのため、研究者などの専門家や、期間を限定した内部公開を模索すべきと考える。特に祭祀の状況が良好な状態で発見されたことから、それらの復元的な展示が望まれる。

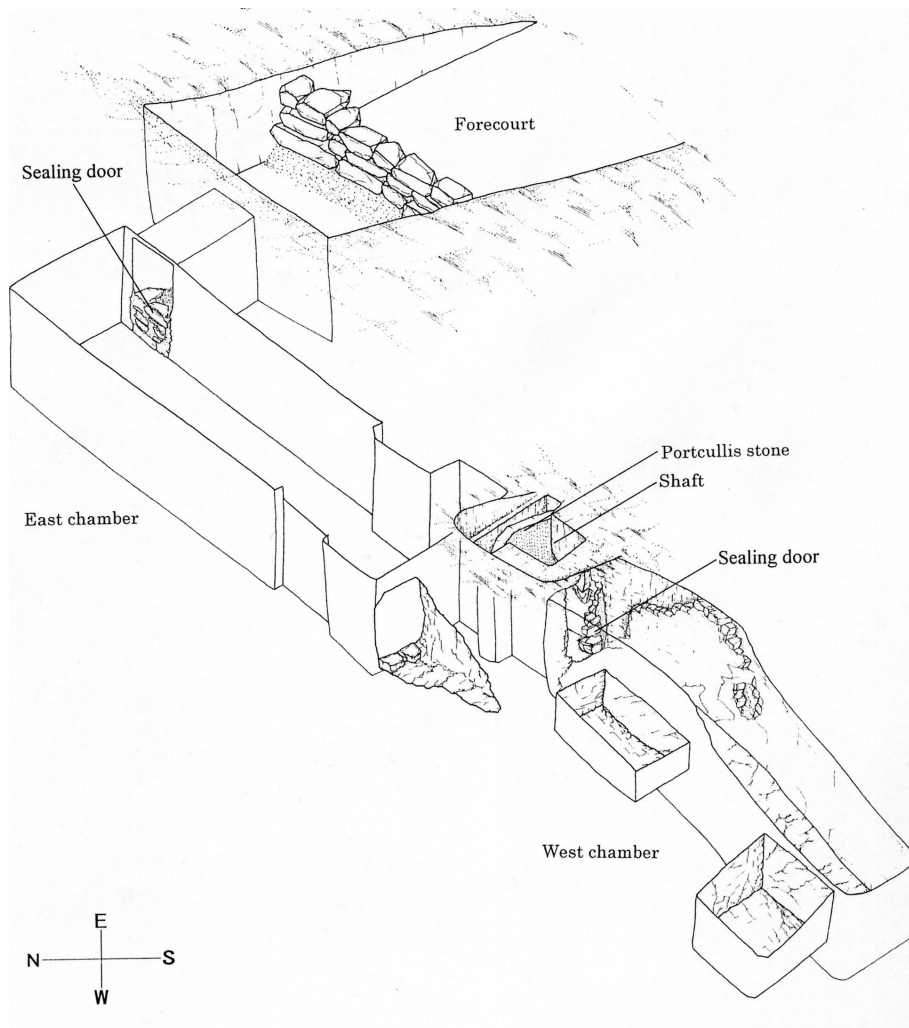


Fig.6 AKT02 内部構造



Fig.7 AKT02 内部

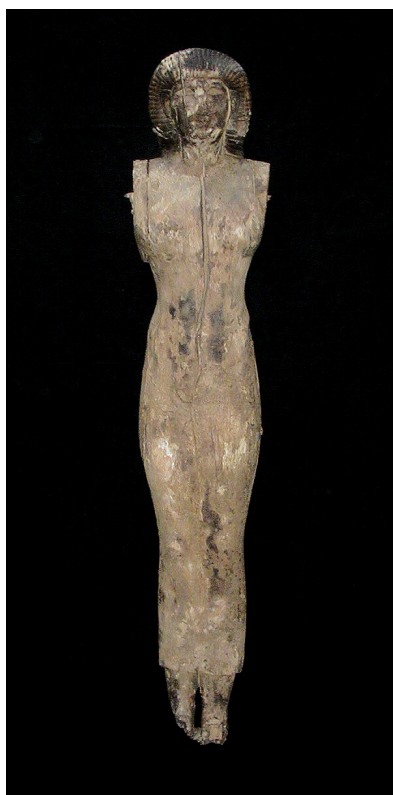


Fig.8 等身大木製女性像

(3) 日乾煉瓦遺構

①概要

丘陵頂部の北西から「日乾煉瓦遺構」と名付けられた日干しレンガを用いた建造物が発見された。遺構の残存状況は良好ではなく、壁体の最下段ないし数段が部分的に残るのみであった。日乾煉瓦遺構が築かれた場所は最も標高が高く、遺構は地山を矩形のプラットフォーム状に整地した上に築かれた。高台の西側は急峻な崖となり、残る三方には、高台を取り囲むように空堀が掘られていた。

当初の状態をとどめるのは、高台の東西縁辺に沿って、約 1.5m 幅で南北方向に並べられた煉瓦列だけであったが、当初は煉瓦壁が矩形に回る平面と想定され、南北の長さは外法で約 25m、東西の幅は外法で約 22m と測られた。

矩形に囲まれた煉瓦壁の内部は完全に失われたため、具体的な姿は不明である。しかし、発掘調査の過程では、周囲から彩色の施された石膏プラスター片や泥モルタル片が多数出土した。また石灰岩で作られた柱礎石や戸口敷居も発見され、彩色の施された複数の部屋をもつ、王にふさわしい壮麗な建造物であったと推察される。崩落した日乾煉瓦の中には、第 18 王朝の王、アメンヘテプ 2 世およびトトメス 4 世の王名が押された煉瓦が含まれていた。またトトメス 4 世の名前を刻んだ石灰岩碑も 26 点出土し、この二人の王に関係した建物であったと考えられている。だが、建造物の性格や増改築の編年など詳しいことは分かっていない。

②現況

遺構は劣化が進行し、消失のおそれが危惧された。そこで、シリコーン樹脂溶液を日乾煉瓦に含浸させる保護措置やパラロイド B-72 を用いた日乾煉瓦の強化策などが講じられた。遺構の劣化を防ぐために、オリジナルの日乾煉瓦の上には黄色細砂が被せられた。一方、遺構を表示させる観点から、遺構平面に沿って現代の日乾煉瓦を据える試みも実施された。

③保存整備計画案

保護と表示を目的とした保存措置により遺構の劣化は抑制されたと考えられるが、保護用に遺構を覆った日乾煉瓦や泥モルタルは強風や結露などにより劣化しており、定期的なメンテナンスが必要である。また保存措置は試験的に行われた側面が強く、マウンドや周囲の溝などについても十分な措置が施されていない。特に小動物による煉瓦壁の破壊やマウンドの掘削などが認められ、周辺部分の整備が必要である。

遺構の残存状況が良好でないため、観光客に遺構の存在と雰囲気伝えるためには、復元的な表示が必要と考える。残存状態が悪い場合、全体像の完全な復元は叶わないが、残存する遺構部分に沿って日乾煉瓦を積み重ねることで、使われた建材とおおよその規模を伝えることは可能である。また発掘調査では建物の壁や天井を飾っていた装飾片が多数出土し、王の建物にふさわしく、壮麗な建物であったことが判明している。こうした特徴をどのように表示していくかも今後の課題の一つとなろう。

同様のことは出土遺物にも当てはまる。細かな彩色の施された土器など王の建物にふさわしい遺物が多数発見されており、研究者からも注目されている。こうした遺物に関する研究成果をどのように多くの人に提示するかも保存整備の一つとして取り組む必要があるだろう。

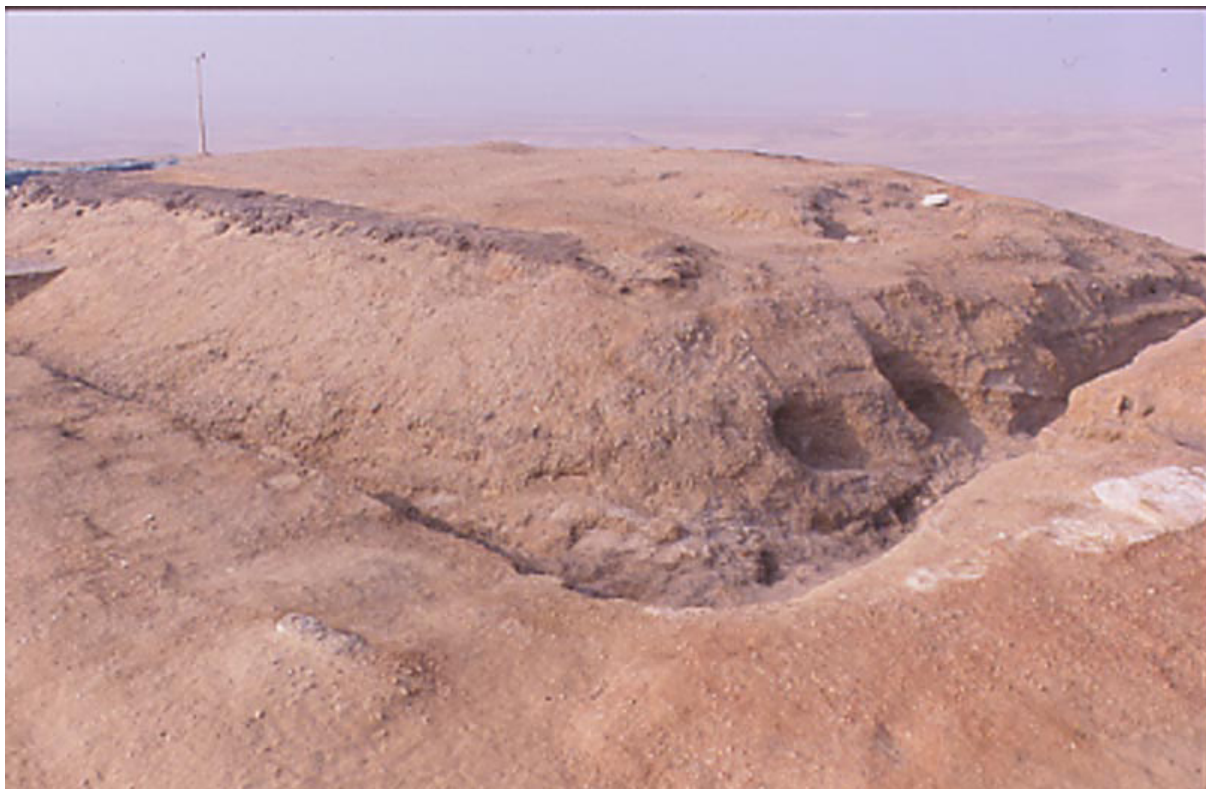


Fig.9 日乾煉瓦遺構 発見時



Fig.10 日乾煉瓦遺構 遺跡保存現状



Fig.12 青色彩文土器



Fig.11 ステラ

(4) カエムワセトの石造建造物及び付属家屋

①概要

遺構は発見された壁面レリーフブロックや花崗岩碑に刻まれた銘文、鎮壇具などの研究から、ラメセス2世の第4王子カエムワセトに関わる遺構であったことが分かっている。カエムワセト王子は、賢人の一人として伝えられる高官で、数多くの遺物を残したが、彼自身の建築遺構はほとんど知られておらず、古建築に強い関心を持っていたとされるカエムワセト王子が、自身の建造物にそうした知見をどのように反映したかを具体的に知ることができる遺構として重要である。

遺構の残存状況は必ずしも良好ではなく、原位置を保つ石材は限られていたが、東西に長軸をもち、東側にロータス柱が林立するポルティコを備え、その西側に前室および奥室を配置する構成であったことが判明した。また周囲に散乱していた石材の中には未完成を示す部材も含まれ、遺構の一部は未完成であったと判断された。こうした未完成部材は建設工程を考える上で重要な手がかりを与え、柱や壁体の構築方法を復元することもできた。

石造建造物の西側からは日乾燥瓦を用いた小規模な家屋が発見された。石造建造物に付属する施設と考えられたが、出土遺物は限られ、機能については不明な点が少なくない。

②現況

カエムワセトの石造建造物は、「石造」の名を付けているものの、原位置を保つ石材の数は極めて少ない。原因の一つは後世に大規模な破壊を受け、多くの石材が持ち去られたことにある。もう一つの理由として、この遺構の場合、石材は表面に貼り石として使われ、壁の内部などには土砂を詰める構造を採っていた。このた

め表面の石材が失われると、強風などによって内部の土砂が失われ、遺構そのものが劣化することにつながったと考えられる。発掘調査によって遺構周囲の土砂や石材が取り除かれたことにより、遺構はむき出しの状態となり、風化が一層進む危険が高い。そこで遺構を保護するために残存する石材の周囲にブロックを並べ、内部に砂を充填する措置をとってきた。あくまでも将来の抜本的な保存整備までの暫定的な保護措置として行われたものであり、早急な保存整備が強く求められる。

③保存整備計画案

出土した石材などの分析から、遺構は復古的な様式を採用しているなど、建築的に興味深いことが分かっている。しかし残存する遺構部分のごくわずかのため、そこから上部構造を推定ことは困難である。そのため保存整備にあたっては、失われた上部構造を復元的に表示する方法が好ましいと考える。

例えば、東側のポルティコについて考えると、オリジナルの石材や礎石が残る南側半分は遺構として保存することにし、失われた北側半部分を復元エリアとして整備する方法が挙げられよう。また単に柱を立てるだけでなく、取り上げられた柱材を並べながら、柱が完成するまでの手順を説明的に展示することで、研究成果を活かすことも可能となりうる。

またポルティコには、側面および背面には質の高いレリーフ装飾が施されていたことが判明している。壁面装飾は建造物の一部を形成していたものであり、この復元研究の成果を示した整備方法が望まれる。レリーフは前室、奥室の壁面にも備えられており、レプリカなどを用いた展示方法を検討すべきである。

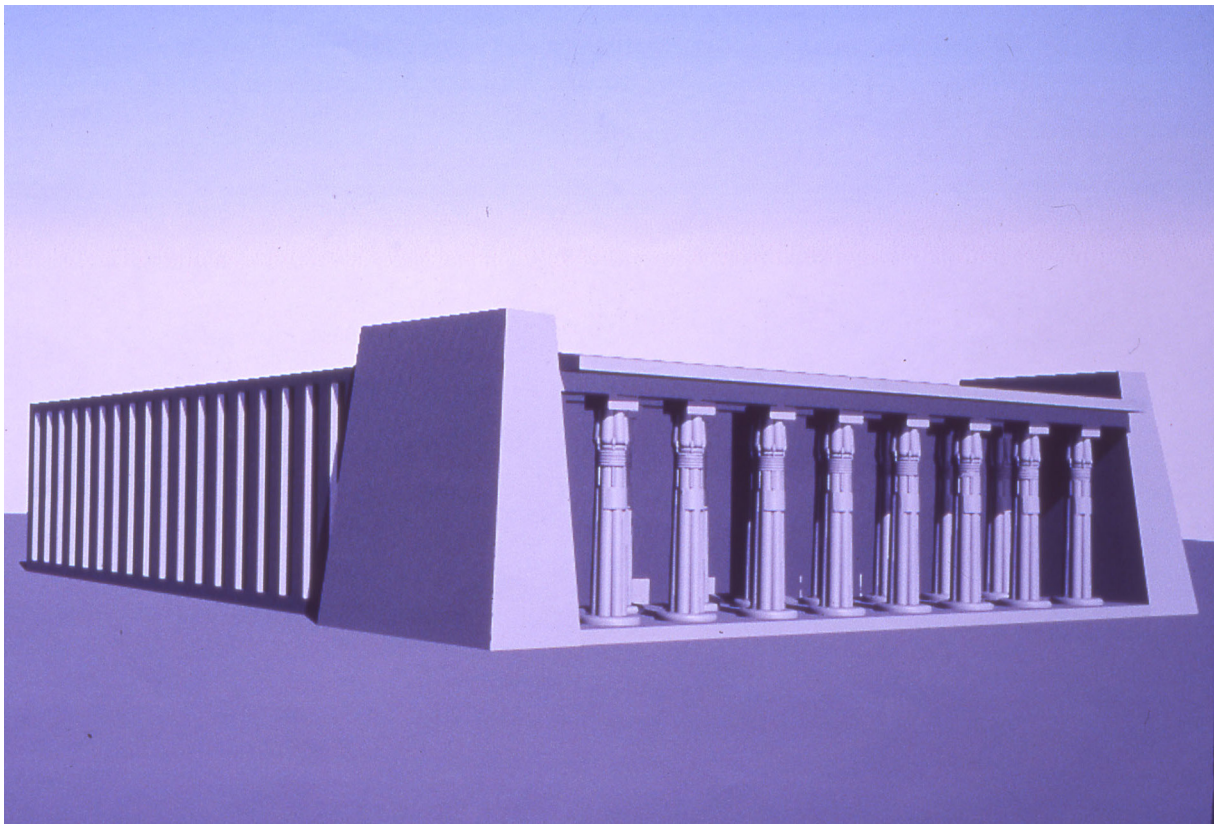


Fig.13 カエムワセトの石造建造物 復元案



Fig.14 カエムワセトの石造建造物 発見時



Fig.15 カエムワセトの石造建造物 遺跡保存現状

(5) イシスネフェルトの岩窟墓

①概要

丘陵頂部の北東から石灰岩で作られた墓の礼拝堂(トゥーム・チャペル)と岩窟墓1基が2009年に発見された。岩窟墓は、内部に納められた石棺からカエムワセトの娘イシスネフェルトを埋葬した可能性が高いことが分かっている。一方、上部構造の礼拝堂は未完成のまま作業が放棄されたと考えられている。この地域における新王国時代の墓は、礼拝堂の中庭に入り口となる竪坑を穿つことが一般的であるが、イシスネフェルトの竪坑は礼拝堂の外側に設けられ、中庭からは掘削途中の竪坑が発見された。一方で、イシスネフェルトの埋葬室は、礼拝堂背後のピラミッドの直下に位置するように計画されており、両者の関係が深いことは間違いない。この礼拝堂がイシスネフェルトの礼拝堂として計画されたかについてはなお慎重に検討する必要があると考え、本稿では両者を別に扱うことにする。

イシスネフェルトの岩窟墓は、竪坑および下降通路を経て一辺4mほどの方形の埋葬室へと導かれる構成をとっていた。埋葬室の南東隅には石灰岩製の棺が壁に接するように据えられ、その形状は本体が矩形の箱形をし、蓋は上面が蒲鉾状で両短端に突起が付く復古的な様式であった。石棺内部には木製の人型棺が、頭を北側に向けて収納されていたと推測されるが、発掘時には既に失われていた。

②現況

石棺の身部は約四分の一が破壊され、周囲に小片として散乱していた。表面に刻まれた装飾をもとに倉庫で断片の接合作業が進められている。

蓋石は四等分され、埋葬室内に散乱していたが、大きな欠損は見当たらず、ほぼ当初の姿に復元された。現在、倉庫において保管されている。

竪坑および埋葬室の岩盤は亀裂こそみられるものの安定しており、崩落の危険は低いと考えられる。そのため特別な補強措置はとっていない。しかし発掘調査によって内部の土砂が取り除かれ、環境が急速に変化したと考えられ、また保安上の理由から閉め切った状態になっており、こうした状況が岩盤などに何らかの影響を及ぼす可能性は否定できない。現在温湿度計を設置し、基礎データの収集を図っている。

③保存整備計画案

イシスネフェルトの岩窟墓には壁画などの装飾はないものの、石棺は王の孫娘にふさわしい壮麗なもので重要である。石棺はすでに四分の一が破壊され、細かな亀裂が多数走るなど不安定な状態にある。加えて通路および竪坑の幅は狭く、石棺を室内に搬入する際、苦心しながら作業を行っていたことが痕跡から知られている。こうした点を勘案すると、石棺を埋葬室から外に持ち出すことは困難と思われ、埋葬室の中で断片の接合作業などの復元作業を進め、将来の展示に備えるべきと考える。

サッカラ地域の新王国時代の墓では、10メートルを超える深さの竪坑も珍しくなく、また狭いため、地下室を公開し、一般の観光客を入れるケースは極めて少ない。近年、公開されたサッカラのマヤの墓では、別の場所に浅い地下室を新しく掘削し、地下から壁面レリーフを移築して展示する方法が採られている。イシスネフェルトの岩窟墓は、竪坑の深さが2m程度と浅く、また岩盤の状態も安定している。そのため、埋葬室を公開し、石棺を観察できるような形で整備するのが望ましいと考える。



Fig.16 イシスネフェルトの埋葬室内部 発見時



Fig.17 礼拝堂 遺跡保存現状

(6) 礼拝堂

①概要

礼拝堂は、南北約 28 m、東西約 10 m の規模をもつ石灰岩製の建造物であった。遺構の残存状況は良好でなかったが、基礎石や一部の壁体が原位置を保っていたため平面を復元することができ、周辺地域の遺構と比較した結果、研究者の間でトゥーム・チャペル (Tomb Chapel) と呼ばれる、古代エジプト、新王国時代後期 (第 18 王朝末から第 20 王朝) の高官墓の上部構造と判断された。

正面に塔門を備え、4 本の柱をもつ中庭、同じく 4 本の角柱を備えた前室、そして礼拝室と左右の側室から構成され、礼拝室の背後にはピラミッドが備えられたと考えられる。しかしながら、中庭の床石は張られておらず、また柱や梁、壁面レリーフは断片すら発見されなかった。中庭に穿たれた竪坑は数メートル掘削して中断されており、礼拝堂は未完成の状態で作業が放棄された可能性が高いと考えられる。

②現況

遺構に使われた石灰岩ブロックはもろく、発掘時には塩類風化によってチップ状を呈していた。壁体の最下段がわずかに残る程度で、遺構消失の危険性が窺われたことから、壁体の周囲を新材で囲み、内部に砂を充填する保護措置をとった。

③保存整備計画案

礼拝堂はピラミッド脇に穿たれたイシスネフェルトの岩窟墓と密接な関係を持ち、この岩窟墓の内部公開と合わせて、礼拝堂の構成が理解できるように整備することが望まれる。遺構に使われた石灰岩ブロックは風化が進み、これらを露出させることは困難である。このため遺構そのものは埋め戻し、その上に新材で復元するのが適当と考える。特に遺構が未完成の状態で放棄された可能性が高い点が遺構の特徴の一つでもあることから、現状を忠実に再現することを心がける必要がある。

4. まとめ

アブ・シール南丘陵遺跡の保存整備計画について、建築的な観点から私案を提示した。ピラミッドを一望の下におさめることができるこの場所は、集客効果が大いに期待できる観光資源であり、遺構がいずれも王や王族に関わる第一級の資料的価値を持っていることを勘案すれば、積極的に整備し、公開を目指すのが好ましいと考える。

またアブ・シール南丘陵遺跡の場合、石造、煉瓦造、岩窟造とさまざまな種類の建築材料による建物が作られ、それらを一つの場所で体感できる利点は大きい。さらに竪坑の浅い岩窟遺構が多く、観光客を地下の内部まで導くことが可能である点も、公開を検討するうえで重要な要素である。

遺構の残存状況はいずれも良好ではないため、公開を目指す場合、遺跡の復元的な表示を考える必要がある。その際失われた上部構造を立ち上げて、復元像をわかりやすく提示するにとどまらず、これまで重ねられた研究成果も提示できるような、屋外博物館的な役割も併せ持った整備が望まれよう。

アブ・シール南丘陵遺跡のもう一つの大きな特徴として、出土した遺物の質的な高さが挙げられる。現在、収蔵庫や各地の博物館に収められているが、本来、遺物と遺跡は分かちがたく結びついているもので、一体として扱うことで相乗的な効果を発揮するものである。民主化運動の高まりによってムバラク前大統領が退陣に追い込まれた、いわゆるアラブの春以降、エジプトの国内情勢は安定せず、治安の面でも依然不透明である。

丘陵は人の住む町から離れた位置にあるため、保安上の問題を考えると、例えば出土したレリーフブロックをそのまま屋外に展示することは避けるべきであることは言うまでもない。レプリカなどの代替品を活用しながら展示する方法も検討する必要がある、そのための研究を推し進める必要がある。

観光客を含む一般公開を考えた場合、遺跡の整備だけでなく、そこに至る道や車、トイレや管理施設などの周辺設備についても検討する必要がある。遺跡の公開を前提として、どのような問題が起こりうるかをさらに検証し、実現に向けて着実に進めることが強く望まれる。